様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１１９９９

研究課題名（和文）米国所在の占領期東京写真関連コレクションのカタログギングと写真読解手法の一般化

研究課題名（英文）Cataloging and generalization of photo-reading methods for a collection of photographs taken in Tokyo during the Occupation located in the U.S.

研究代表者
佐藤　洋一（Sato, Yoichi）

早稲田大学・社会科学総合学術院・教授

研究者番号：１０２７７８３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：第一に占領期日本で撮影された写真を複写収集したことである。米国各地に所在するパーソナル写真のコレクションを調査した。35の学術・研究機関を訪問し、156 のコレクションを実見した。その過程で得られた米国の写真資料事情についても報告を行なってきた。第二に占領期にアメリカ人が東京で撮影した写真全体のアウトラインを描出したことである。それまで公式写真を中心に形成されてきた占領期日本のイメージに対し、資料範囲を広げ、新たなイメージを付け加えることとなっていること。第三にこうした資料を社会的に発信するために、写真展を企画し、図録を制作するなどして、成果の社会的な還元を積極的に行なってきたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果の学術的意義とは、占領期写真の全体像を素描することで、一般に歴史的資料としては位置付けの低い写真、その中でも取り扱いが微妙であったパーソナル写真を取り上げ、写真資料としての価値を証明し、学術的な資料として取り扱いうることを示したことである。第二に、公式写真によって形成されてきた占領期イメージに対するオルタナティブを提示したことである。第三に、公式写真からパーソナル写真まで幅広い写真を研究の俎上にあげ、その活用と読み解きの方法を提示したことである。さらに第四に、こうした成果を基礎として、各地での写真展を企画実施し、図録作成の型を提示したことである。

研究成果の概要（英文）：The first result of this research was the collection of photographic reproductions of photographs taken in Japan during the Occupation. I surveyed collections of personal photographs located throughout the U.S. We visited 35 academic and research institutions and viewed 156 collections. I have also reported on the state of photographic materials in the U.S. obtained in the process. Second, we have outlined the overall picture of photographs taken in Tokyo by Americans during the Occupation. This broadened the range of materials and added new images to the image of Japan during the Occupation, which had been formed mainly from official photographs. Third, in order to disseminate these materials to the public, we have actively returned the results to society by organizing photo exhibitions and producing catalogs.

研究分野：都市史

キーワード：占領期　写真　アーカイブ　都市空間

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

◆占領下の写真記録の発掘

占領期、日本に進駐してきた米国関係者がプライベートで撮った写真は厖大な量に及ぶ。近年米国をはじめとする占領軍側の国々から史料が発掘、発信されている。これまでも、その一部の存在が明 かされると、「貴重写真」「秘蔵写真」という形容詞とともに、たびたび日本でも紹介されてきた。進駐し、撮影をした世代が物故しはじめると、遺族がそれらを手放す。史料館や大学に寄贈されたものもあれば、オークションに流れたものもある。主に 90 年代以降のことである。 今世紀に入ると、所蔵元の大学や史料館側が、写真をデジタル化し始めた。さらにデジタルデータを web 上で公開する館もいくつも現れた。日本で紹介されたものは、巨大な象のごく小さな部位に過ぎず、いわゆる「貴重写真」「秘蔵写真」は海の向こうに厖大に眠っている。日本に進駐した占領軍関係者の中には、職業軍人だけではなく、研究者や表現者、報道関係者など多様な職業従事者がいた訳だから、彼ら個人が撮影した写真は、多様なものだろう。戦中期から敗戦をはさみ、占領期にかけては、その後の都市を形作った最も重要な時期だが、戦時の欠乏状況、 敗戦とその後の混乱などを背景に、あるべき資料がない時期でもある。我々が「貴重写真」「秘蔵写真」ともてはやしてきたのも、あるべきものがない時期の話しだからである。そのような中で、筆者は主に国立公文書館にて、占領期の米軍による写真を調査、紹介してきた(拙著『図説占領下の東京』『米軍が見た東京 1945 秋』)。写真は都市の実態を知る上で、有効な史料だと考えたからである。

◆カメラアイによる都市史

本研究は、写真記録を①都市空間というフィールド、②撮り手、との不可分な成果として見ていく。都市史=都市空間を形作った歴史という観点から写真記録が有用だとされているのは、写真が持つ〈誰が撮っても同じように写る〉というカメラアイの機械性である。この機械性に起因する、写真の客観的記録という側面のみが取り出されるからである。つまり、どこで撮られたのか(where)、何が写っているのか(what)が重要 であるが、その情報さえあれば、撮影行為の内的な側面、すなわち、誰が撮ったのか(who)、どのように撮られたのか(how)、なぜ撮られたのか(why)ということはさほど問題になることがない。

しかし、写真を撮るという行為は、そこに撮り手が介在する限り、全て機械的に行われるものではない。撮る対象が都市空間であるとき、撮影者自体も都市空間の中にいる。つまり都市の写真とは、都市空間の記録であるとともに、都市空間における撮影者のあり方の記録でもある。したがって、本研究では、どこにカメラを向け、どのように撮られたのか(how)、なぜ撮られたのか(why)という撮影者のあり方にも言及しながら考えていくこととする。すなわち筆者は都市空間における撮影者の生態をも含めたカメラアイによる都市史を意図している。

◆研究課題の核心をなす学術的「問い」

1)形成空間と所蔵空間のズレをいかに埋めるか。

占領期の史料に関しては、史料形成空間(写真史料の場合は撮影空間)は日本だが、所蔵空間は米国に所在するものが数多い。写真史料も同様で、占領軍および関係者による写真史料は数多いものの、そのほとんどは現在、米国に所在している。この形成空間と所蔵空間のズレから、一般に以下のような傾向が生じやすい。

〈米国での無関心〉米国では撮影場所と切り離されており、地理的観点から史料の意味が理解されていないことも多く、公開はされているものの、関心が払われずに置き去りにされる。

〈日本での過大な注目〉一方日本においては、そもそも手元に史料が乏しいことから、 米国所蔵というだけで、「貴重写真」「秘蔵写真」とのふれこみで写真史料をもてはやしてしまう。正確な意味の理解よりも先に、目を引くもの、わかりやすいものに、人々は飛びつきがちである。

2)都市史において写真史料をいかに活用するか。

都市史のジャンルにおいては、写真を扱うこと(読むこと) 史料保管空間が極めて素朴な意識の下になされてきた。ことに都市空間や都市風景を考える場合、何が写っているのかについては関心が強いが、その写真がどのように撮影されたか、なぜ撮影されたのかという「写真史料に対する批判」が甘い。あたかも自動的に写真が撮られ、収蔵され、公開されてきたかのように扱うのである。撮影の背景、背後にある文脈あるいは政治的作用からは切り離されたものとして捉えられがちである。

以上の 2 点から、史料をどう読むのか、その史料にはどういう背景と意味があるのかを、正確にかつ体系的に提示する必要がある。さらに、

3)写真からの読み取りをいかに行うか。

史料形成者と所蔵者が切り離され、70 年ほどの時間が経過し、写真の読み取りには相応の知識と技術が必要 になっている。その中には撮影者写真の背景が正確に書き残されていない、いわば〈出所不明写真〉もあるため、写された時期、場所の割り出しはもちろん、被写体についての理解をもとにその写真がどのような人物によって撮影され、どのような意味と価値を有するのかについて、正確な推論をする必要が出てくる。こうした〈出所不明写真〉は、撮影からの年月が経過すればするほど増え続ける訳だが、それを読み取るだけの技術と知識は、属人的になっ

ているのが現状である。読み取りのための技術や知識をどのように外在化できるか。その写真史料のことを全く知らない後続の世代でも、関われるような写真の読み方の一般化を考えるべき時が到来している。

## ２．研究の目的

本研究においては、米国に所在する占領期東京を撮影した写真コレクションを可能な限り渉猟し、それらのカタロギングを行うとともに(A. 基礎的カタロギング)、コレクション毎の比較を通じて史料的な評価を行う(B. 評価)。さらに一見困難だと思われるような写真の読み解きを行い(C. 読み解き)、その過程での資料調査等の組織化を含めた読み解きのフローを整理し、読み解き方法を一般化することを目指す(D. 読み解き方法の一般化)。

## ３．研究の方法

◆A.基礎的カタロギングと評価作業

A.基礎的なカタロギングは、概ね以下手順で進める。

1)概要の把握:全点数やその中で の東京の写真が含まれている枚数、撮影者、撮影年、撮影場所などの基礎データ。

2)スキャニング:該当する写真を中心にスキャニングまたは撮影を行う。一応のカタログづくりが目的であるので、プリント現物は 300-600dpi 程度、フィルムの場合は 1200-2400dpi 程度でスキャニングする。可能な限り悉皆的に行うこととする。

3)データの集約化: 1)2)のデータをデータベース上に集約する。

4)関連資料 ： 資料を収集し調査を行う。

◆B.評価

形質上の特質、履歴上の特質、内容の特質(i: 都市史記録(景観、環境など)ii: 写真史的史料価値、iii) 撮影者の身体とまなざしの記録)といった観点から、比較を行うとともに、公的な写真との比較も視野に入れ、それぞれのコレクションの持つ意義を明確化する。

◆C.読み解き:

ケーススタディとして対象となるコレクションに含まれる該当の写真に関して、以下の 3 つのレベルでの分析と読み解きを行う質的な調査である。〈〉内は調査で用いられる検討材料である。

1)カットレベル(what/where): 写されている事物の明確化〈地域資料など文献資料〉、撮影場所の同定〈文献資料・地図や空撮写真〉

2)シークエンスレベル(how/where): 撮影順序 復原による撮影者動線の明確化〈文献資料・地図や空撮写真〉、場所の同定〈地図や空撮写真〉

3)撮り手レベル(who/why): 訪日の目的・任務・ 家族状況など撮影者の背景情報〈主に一次資料調査、関係者への聞き取り調査〉、撮影のもつ意味の推定〈主に一次資料調査〉、史料の保管経緯〈主に一次資料調査、関係者への聞き取り調査〉

◆D. 読み解き方法の一般化:

結果を振り返りつつ、上記の 3 つのレベルでの読み解き作業を整理し、一般的な読み解きのフローを整理し、これを用いつつ、その実効性を検証する。

## ４．研究成果

1)史料収集と基礎的な作業

・米国での調査活動

2018 年 9 月から 12 月、19 年 4 月から 9 月の約９ヶ月間、米国各地で調査を行った。35 の学術機関を訪問し、156 のコレクションを実見し、約 9 万ショットの複写撮影をした（佐藤「アメリカ人が撮影した戦後日本のヴァナキュラー写真の調査について」、佐藤「写真探して４万キロ・米国調査報告会」)。その結果をデータベースに集約した。それを基礎として、上で述べた研究課題に則して、成果をまとめた（佐藤「第二次大戦終戦後にわが国で撮影された写真の米国における所蔵状況調査」)。またそれら写真史料を「まなざしの記録」として全体的に見ると、どのような傾向があるのかをまとめた（佐藤「占領期写真におけるさまざまなまなざし」）

・米国での史料所蔵の状況と活用について

結果的に多数の史料にふれ、多くの所蔵機関を訪れたことから、米国での写真史料の所蔵状況について、その傾向などをまとめて、伝える機会を得た（佐藤「米国における占領期日本の写真資料をどう捉えるのか：現状・全体像・日本への還元における課題」)。

さらにそれらを日本国内にどう「里帰り」させ、どう活用していくのかという一般的な課題に関しても、整理を試みた（佐藤「写真の里帰り: 米国所在の戦後日本の写真を地域へ還元するプロセスとその課題」)。

2)写真史料と読み解きについて

・ヴァナキュラー写真としての占領期写真

写真史料をどう捉えるかという一つの試みとして、民俗学的概念であるヴァナキュラーという観点から、米国に所在する占領期写真について考察を行った（佐藤「「ヴァナキュラー写真」と「ヴァナキュラーの写真」 終戦直後に米国人が日本で撮影した写真をめぐって」）

・パーソナル写真に対置されるオフィシャル写真について

研究の中心であるパーソナル写真を扱う一方で、対立的存在であるオフィシャル写真とそのコ

レクション形成の具体的なあり方については、筆者の認識は曖昧なままであった。そこで占領末期に日本にて活動していた極東軍司令部の文書（米国立公文書館所蔵）をもとに、オフィシャル・フォトの形成について、以下の成果をまとめた（佐藤「占領末期におけるオフィシャル・フォト形成の一断面 -極東軍司令部 Signal Section 文書から考える」）

・読み解きの主体

写真を読み解くにあたっての主体は、個人では限界がある。占領期に日本に滞在した鳥類学者オリヴァー・L・オースティンのコレクションを扱った際に形成された自然発生的な研究グループが、こうした作業を考える上でのヒントを提供していると思われたため、同グループの活動の経緯とその「成果」をどう考えるのかについてまとめた（佐藤「インディペンデントで自発的な調査体:鳥類学者オリヴァー・L・オースティン コレクションの写真調査をめぐって」）。

3)同定手法について

・写真撮影地点の同定

上述の研究課題に則して、米国で入手した史料のうち、2019 年 1 月から 3 月まで長期滞在中であった京都の写真を例に、写真撮影地点同定方法の一般化を試みた（佐藤「古写真の空間的視点：撮影位置同定について」佐藤・衣川「写真撮影地点同定方法一般化の試み：占領期のパーソナル写真を事例として」）。

4)ケーススタディ・史料活用の応用

・東京・銀座でのケーススタディ

こうした作業を基礎として、東京・銀座で占領初期の 1945 年秋・冬に撮影された写真のみに絞って、史料の分類と分析、撮影地点の同定作業とマッピング、写真から読み取れる具体的な都市空間の諸相を記述した（佐藤・衣川「占領期写真の複合的活用に関する試み ： 一九四五年東京・銀座のケーススタディ」）。

・京都での展覧会など

これらの知見を生かし、また大阪在住の写真コレクター・衣川太一氏所蔵の写真も加え、京都の研究者に呼びかけて、占領期京都で撮影されたカラー写真の展覧会を行った（「戦後京都の「色」はアメリカにあった!」京都文化博物館）。その一環として図録を刊行した（植田・衣川・佐藤『戦後京都の「色」はアメリカにあった! : カラー写真が描く《オキュパイド・ジャパン》とその後』『増補新版 戦後京都の「色」はアメリカにあった!: 占領期カラー写真が描く〈オキュパイド・ジャパン〉とその後』）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐藤 洋一、衣川 太一 | ４．巻<br>5 |
| ２．論文標題<br>[13] 写真撮影地点同定方法一般化の試み：占領期のパーソナル写真を事例として | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>デジタルアーカイブ学会誌 | ６．最初と最後の頁<br>s9～s12 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.24506/jsda.5.s1_s9 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐藤洋一 | ４．巻<br>19(1) |
| ２．論文標題<br>第二次大戦終戦後にわが国で撮影された写真の米国における所蔵状況調査 | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>社会科学総合研究 | ６．最初と最後の頁<br>103-120 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐藤 洋一 | ４．巻<br>4 |
| ２．論文標題<br>[A32] 写真の里帰り：米国所在の戦後日本の写真を地域へ還元するプロセスとその課題 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>デジタルアーカイブ学会誌 | ６．最初と最後の頁<br>120～123 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.24506/jsda.4.2_120 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐藤 洋一 | ４．巻<br>4 |
| ２．論文標題<br>[12] インディペンデントで自発的な調査体：鳥類学者オリヴァー・L・オースティンコレクションの写真調査 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>デジタルアーカイブ学会誌 | ６．最初と最後の頁<br>s5～s8 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.24506/jsda.4.s1_s5 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤 洋一、衣川 太一 | 4．巻<br>5 |
| 2．論文標題<br>[13] 写真撮影地点同定方法一般化の試み：占領期のパーソナル写真を事例として | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>デジタルアーカイブ学会誌 | 6．最初と最後の頁<br>s9～s12 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.24506/jsda.5.s1_s9 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤洋一 | 4．巻<br>347 |
| 2．論文標題<br>CA1993 - 米国における占領期日本の写真資料をどう捉えるのか：現状・全体像・日本への還元における課題 | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>カレントアウェアネス | 6．最初と最後の頁<br>10-16 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤洋一 | 4．巻<br>20 |
| 2．論文標題<br>極東軍司令部文書からみたオフィシャル写真の形成　－1951－52年を対象として | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>Intelligence | 6．最初と最後の頁<br>86-100 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤洋一 | 4．巻<br>4-2 |
| 2．論文標題<br>写真の里帰り：米国所在の戦後日本の写真を地域へ還元するプロセスとその課題 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>デジタルアーカイブ学会誌 | 6．最初と最後の頁<br>120-123 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.24506/jsda.4.2_120 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐藤洋一 | ４．巻<br>19-2 |
| ２．論文標題<br>研究ノート「第二次大戦終戦後にわが国で撮影された写真の米国における所蔵状況調査」 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>社会科学総合研究 | ６．最初と最後の頁<br>印刷中 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>佐藤洋一 |
| ２．発表標題<br>占領末期におけるオフィシャルフォト形成の一断面　-極東軍司令部 Signal Section 文書から考える |
| ３．学会等名<br>20世紀メディア研究所 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>佐藤洋一 |
| ２．発表標題<br>占領期写真におけるさまざまなまなざし |
| ３．学会等名<br>大手前大学交流文化シンポジウム |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yoichi Sato |
| ２．発表標題<br>Another portrait of Tokyo |
| ３．学会等名<br>Symposiumu of The Japan Information and Culture Center (JICC) of the Embassy of Japan / Washington DC |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>佐藤洋一 |
| ２．発表標題<br>報告：アメリカ人が撮影した戦後日本のヴァナキュラー写真の調査について |
| ３．学会等名<br>ワークショップ「写真メディアからみるウチとソトのランドスケープ」(京都大学総合博物館) |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>佐藤洋一 |
| ２．発表標題<br>古写真の空間的視点：撮影位置同定について |
| ３．学会等名<br>GIS day in 関西 |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計6件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>植田 憲司、衣川 太一、佐藤 洋一 | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>小さ子社 | ５．総ページ数<br>224 |
| ３．書名<br>増補新版　戦後京都の「色」はアメリカにあった！ | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐藤 洋一、衣川 太一 | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>岩波書店 | ５．総ページ数<br>254 |
| ３．書名<br>占領期カラー写真を読む | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>植田 憲司，衣川 太一，佐藤 洋一 | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>京都府京都文化博物館 | ５．総ページ数<br>118 |
| ３．書名<br>戦後京都の「色」はアメリカにあった！：カラー写真が描く《オキュパイド・ジャパン》とその後 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Yoichi SATO | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>Springer | ５．総ページ数<br>254 |
| ３．書名<br>Sustainable development disciplines for society: Breaking down the 5Ps - People, Planet, Prosperity, Peace, and Partnerships （Washizu.A et al ed. "Sustainable Development Goals from the perspective of photographic archives: A Case Study on Photographs from Occupied Japan"を分担執筆） | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐藤洋一 | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>水声社 | ５．総ページ数<br>176 |
| ３．書名<br>占領期の都市空間を考える | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>久塚純一ほか | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>成文社 | ５．総ページ数<br>740 |
| ３．書名<br>福祉社会へのアプローチ | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| 展覧会「戦後京都の「色」はアメリカにあった!: 占領期カラー写真が描く〈オキュパイド・ジャパン〉」（京都文化博物館）2021年7月24日-2021年9月20日<br>展覧会「続・戦後京都の「色」はアメリカにあった!: 占領期カラー写真が描く〈オキュパイド・ジャパン〉」（京都文化博物館）2023年2月4日-4月2 |

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|